

子どもの周辺

石谷 暢男



現代は心の時代といわれ、大人だけではなく子どもが心を病み、医療機関を受診するケースが増加し、初診は4〜6カ月待ちという専門医療機関も少なくない状況である。実際に、15歳から18歳の死因の第1位が自殺になったことも、ゆゆしき問題である。

心に問題を抱えた子どもたちへの取り組みで重要なキーワードの一つは、セルフエスティーム（自己評価）で

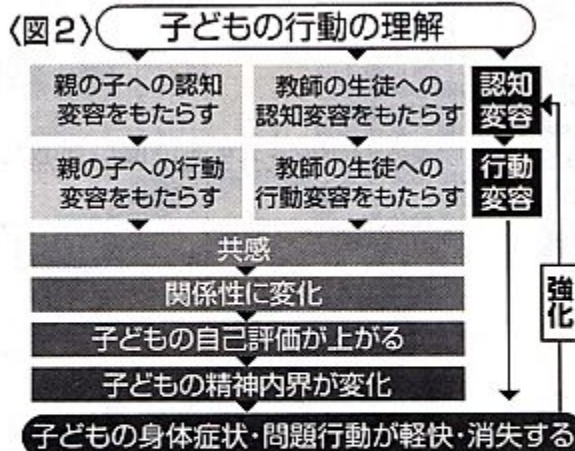
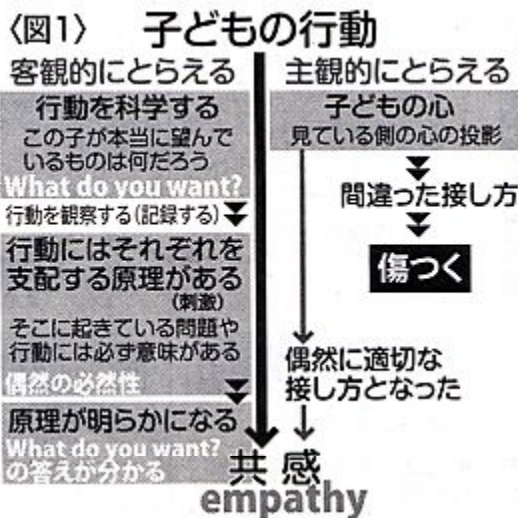
ある。診療場面でも、治療の目的は自己評価を上げることであり、

予防は自己評価が下がらないようにすることである。周囲の大人は思い込みを横において、今ある問題や行動は偶然に起きたのではなく、必ず巡らし、その意味が分

かったその時に子どもたちとの間に共感が生まれる（図1）。周りの大人が子どもを理解し、共感することによって、関係性に変化が起こり、子どもたちの自己評価も上がり、身体症状や問題行動が軽快消失する。さらにその経験が、大人たちの認知や行動を強化し、良い循環が生まれてくる

自己評価上げる取り組み

子どもを観察し理解しよう



ある地方の5歳児健診で、子育てに不安がなく、身体および発達面でも何の問題もない、助言・指導の必要が全くなかった子どもたちとその保護者は34・9%であった。健診を受けた子どもたちが小学校入学後、57%の子どもたちへの対応に教師が苦慮しているというデータがある。

対人関係や社会性などの特徴から発達障害が疑われる子どもたちの数が増え、子どもたちを育てにくくなったとは言われるが、これらの数値が語るのとは、単に、子どもたちだけの問題ではなく、周囲の大人側の問題もあるというのではないだろうか。

（鳥取市・石谷小児科医院院長）

（月1回掲載）